

Glocal Tenri



3

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.11 No.3 March 2010

天理大学 およさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
地球船が向かう地獄と極楽
／井上昭夫 1
- 天理教教理史断章 (51)
城尾文書①
／安井幹夫 2
- 天理教海外伝道の資料 (3)
上海伝道関連史料③
／深川治道 4
- ◀ 「二つ一つ」の環境学 (30)
環境先進国から何を学ぶべきか①
ドイツの最先端は「ごみ」の2分別化
／佐藤孝則 6
- 今日の時代における宗教批判の克服学 (15)
生命山シュバイツァー寺を訪れて
／金子 昭 7
- ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の民族誌学 (12)
ハワイ人の現在
／井上昭洋 8
- 天理異文化伝道の諸相 (68)
コンゴ伝道に見る異文化接触 [34]
／森 洋明 9
- 第8回天理スポーツ・ギャラリー展報告 (13)
バドミントン・ワンダーフォーゲル
／難波真理 10
- English Summary 12
- およさと研究所ニュース 13
宗教研究会「教祖論・開祖論の構築・脱構築」
第4回研究会／第224回研究報告会／中欧
(チェコ、ハンガリー、ポーランド) 環境調
査報告／平成22年度公開教学講座案内

巻頭言

地球船が向かう地獄と極楽

およさと研究所長 井上昭夫 Akio Inoue

「宇宙から最高の気分で帰ってきました。」
これは8日間の宇宙実験を終えてケネディ宇宙センターに帰還した毛利衛宇宙飛行士の第一声である。つづいて、毛利さんは宇宙は素晴らしい場所であり、無重力体験も慣れてしまえば、とても快適ですと語った。それ以来、宇宙を「気分最高の快適空間」と述べたこの宇宙飛行士の感動的なことばが、宇宙に対する一般的な共通認識になったようだ。JAXAの打ち上げた月周回船にも「かぐや」という愛称が付けられている。宇宙は神話性と未知へのロマンをいまでも私たちに伝えている。

しかし、人間にとって地球環境を持参しないむきだしの宇宙空間は、地獄そのものの世界である。空気がないから窒息死するばかりでなく、身体はふくらみ、全身から血液や蒸気が噴き出して崩壊し、無残な姿となり暗黒の宇宙空間に飛散する。わずかに高度19キロメートルで、その地獄は瞬時に姿を現す。宇宙には「大気」(酸素と気圧)がないからである。宇宙飛行士が滞在する宇宙船には、地球の酸素、気圧、温度、食事、音楽などが持ち込まれている。持参しなかったのは「地球の重力」だけである。つまり、毛利さんが宇宙体験は快適だったと語ったのは、宇宙空間に人工的に作られた「地球空間」が快適だったというお話である。

アポロ12号で月面着地を成功させたピート・コンラッドは、月面遊歩を体験する中、いまままでにないjoyous(陽気な)高揚感を味わったと告白している。筆者はコンラッドの口から突然飛び出したjoyousという言葉に一瞬驚かされた。いうまでもなく「陽気ぐらし」はJoyous Lifeと訳されている天理教のキータムであるからだった。つづいてコンラッドは、月面を気持ちよく飛び跳ねるように遊歩する中で「パーパ、パーパパー」というリズムカルな調べが、自然に口から飛び出して来て止まらなかったとも言った。微重力月面上で宇宙飛行士の身体感覚を「音声」が自然に表現したリズムであると解釈した。世界の宇宙飛行士たちからヒヤリングをしためずらしい体験話は数多くあるが、共通している点はただ一つ。宇宙から

見た地球はとてつもなく美しいが、それは視覚の話であって、実は、帰還した「重力」と「大気」が支配するこの惑星地球が、天国・極楽であったという彼らの全身の感覚であった。コンラッドとともに月面歩行を体験したアラン・ビーンは、地球帰還後に月面で使ったハンマーを筆代わりにして微細な油絵を描く画家になった。ビーンはインド洋に着水し、カプセルから出た瞬間に聞こえてきた波の音と波の揺れ動きの中にある自分を感じた時がもっとも感動した瞬間だったと語ったことがある。

「ここはこの世の極楽や」と教祖が歌われた幕末慶応3年のお屋敷は、中山家は貧のどん底で、今のような立派な神殿やおよさとやかたもなかった。世上の天災地獄、戦争地獄、破産地獄、交通地獄、就職地獄、格差地獄、テロ地獄など地獄の様相はきわめて具体的であるが、極楽の描写は貧弱で抽象的である。たぶんそれは極楽では働かなくても楽しみがあるという贅沢な妄想が、地獄の様相の現実逃避から夢見られたからであろう。

「ここはこの世の極楽や」と教えられる「ここ」という空間に宇宙的解釈をほどこせば、「ここ」とは、まさにわれわれが生かされているこの惑星地球ということになるであろう。「ここ」では地獄も天国もある。つまり、地獄の中に幸いも天国もあり、天国の中に退屈や地獄もあるという二律背反のなかで、このガイア宇宙船地球号は私たち人類を運んでいるように思われる。このような考えは「宇宙へ行くのは自分を探しに行くためだ」といったカール・セーガンの言葉を思い出させる。両者を橋渡しするのは「宇宙は神のからだ」とする天理教教理の宇宙論であろう。

月面都市とは月に地球空間をつくるという営みである。つまり、沈黙が支配する月面地獄に地球天国を再現する人類の挑戦という意味になるのか。しかし、月面開発は人類がこの世を極楽にする「こころの進化」を促進するものでなければ神の意志にはそぐわない。その逆は、月面都市の未来が母なる地球を地獄化することにつながるからである。